



これからのホール建築を語ろう



オオキ建築事務所 代表

大木 啓幹

新型コロナウイルスがもたらした社会の変化はパチンコホールにも影響を与えている。これからのホールづくりにはどんな視点が必要なのか。ホール建築の王道を示し続けてきた大木啓幹氏と、進取のデザインで変革を提案し続けてきた鶴田一氏。ともに一級建築士の資格を持つふたりが、これからのホール建築について語り合った。

——今日はコロナ禍を受けたユーノーマルのなかで、今後のホール建築がどんな方向に向かうのかを、お互いにシンパシーを感じ合っているおふたりに語り合っていただきたいと思います。

鶴田

3月初旬に大木先生が「パチンコホールは密閉空間に当たらない」と発信されたのはインパクトが大きかったですね。先日も換気映像実証実験の映像が公開され、マスコミでも報道されていました。

大木

スイスの設計事務所で働いている息子から1月に連絡があって、ヨーロッパでは古い建物をリノベーションして使っているので換気があまりよくないということだった。教会などの集会所も多く、それでいてマスクを付ける習慣もない。だから飛沫感染の危険性が指摘される前に、あつという間に感染が拡大してしまった。そこで、改めてパチンコホールの換気能力を調べたところ、たばこの煙の処理のために建築基準法の換気量よりも設定を多くしていく、1時間に6回程度換気されていることを改めて確認しました。

一方で、テレビで建築の専門家ではない人がホールは3密だと話をしている。そこで、自分が言わないといけないと思ったわけです。

鶴田

今回、コロナ禍の初期からホールが密閉空間ではないというエビデンスを先生から発信していただいて、ホールが3密に当たらないということが少しずつ世の中に浸透していった。強い発信力を持つことの重要性を感じました。

大木

密閉空間と誤解されてしまう理由は、お店の中で何をやっているかわからない店づくりになってしまったことにも原因がある。外に閉鎖的ではなく開放的というのは、一面では良いんだけど、社会の中では異質なものになってしまった気がする。あの閉じられた空間で何をやっているんだろうと。

鶴田

自分はこれまで、かなり異質なホールを作つてきました(笑)。でも、今までのホールの概念と異なるデザインを受け入れてくださるオーナー様はなかなかいません。建築物が地域どつながらりをもつていくか、そのための店舗とはどういうものか。それはオーナー様にそういう視点に共感していただけなければ作れません。

大木

その場所にそぐわない建物は地域の人たちから共感を得られないということだよね。建築だけではなく、社会と共に生していくという部分がパチンコ店にないと、今回のようにイメージ先行で誤解されることになってしまふ。ホールでは災害時に駐車場を開放

続きは月刊アミューズメントジャパン
1月号をご覧ください